



貝殻屋敷



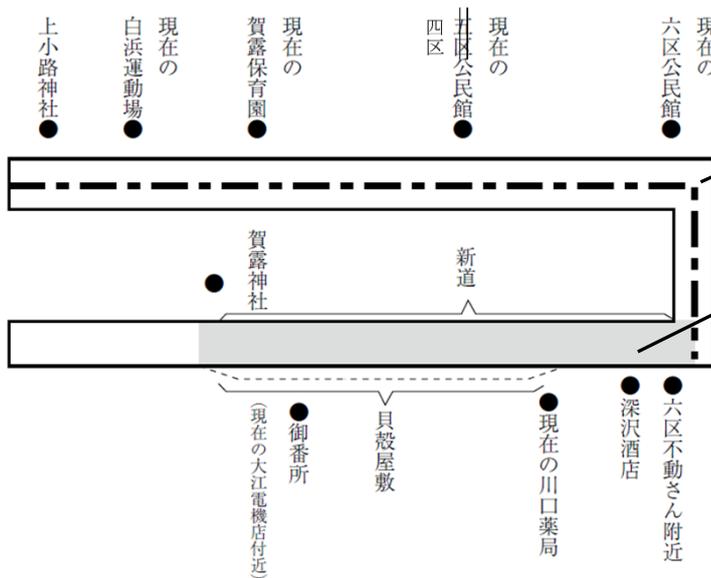
写真左：貝殻屋敷道路（撮影年不明）

写真右：現在の賀露の町並み。右手は貝殻屋敷に続く家々。その背後には沿岸道路がついている。

明治～大正期の賀露の町には、賀露神社の鎮座する丘陵の真下にイトバ（為登場）があり、船着き場として人や荷物の積みおろしをしていました。

大正末から昭和初めにかけてイタヤ貝が豊漁となると、丘陵北側に大量の貝殻が捨てられるようになりました。この大量の貝殻はやがて埋め立てられ、その上に屋敷が建てられました。このようにして造られた地盤の上に建つ旧道の東側の屋敷地は、今も「貝殻屋敷」と呼ばれています。

貝殻屋敷の地盤は弱く、しばしば地盤沈下がみられたため、家を持ち上げて地盤を固める工事が行われました。



この道が賀露の上と下を結ぶ唯一の道であった（明治30年頃まで）。

この道は御番所から六区不動さん付近までの道路が明治34年ごろに完成し、当時新道（しんどう）と呼んでいた（幅2間）。

さらに、貝殻屋敷を造成した時（大正14年～昭和2年ごろ）に御番所から川口薬局までの道路幅1間広げ、幅3間とした。

（賀露誌 P103）

出典

岡村吉彦（2012）賀露港（鳥取港）の「みなと文化」
賀露町自治会（2009）「賀露誌」